JAPAN EVANGELICAL CHURCH ASSOCIATION
日本福音キリスト教会連合
JECAフォーラム
特集 コロナ禍
2020/12/20 NO.110
http://www.jeca.jp
JECAフォーラムは教会連合（JECA）の交わりの広場です

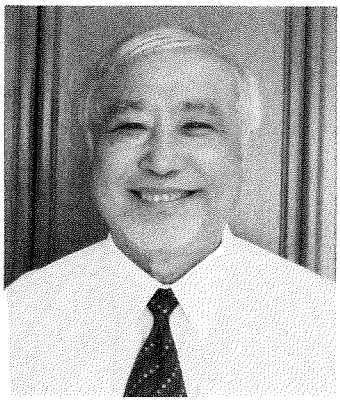
●事務所〒214-0013 川崎市多摩区登戸新町 432-402 ☎ 044-922-0225, FAX044-328-9015 ●郵便振替 00170-1-607164 ● mail jecaoffice@yahoo.co.jp

Contents ＜コンテンツ＞

【窓】コロナ禍の中で　末松隆太郎 …… p.1~2
新型コロナウィルス感染対策窓口 …… p.2~4
コロナ禍での教会の対応
永山福音キリスト教会／水戸下市キリスト教会 …… p.5
橋本キリスト教会／宮崎北聖書キリスト教会 …… p.6
キャンプ場の現状 …… p.7
熊本人吉豪雨災害 …… p.8

窓 コロナ禍の中で

栄聖書教会牧師
末松（すえまつ） 隆太郎（りゅうたろう）



この年の三月ごろから今日まで、私たちが苦慮してきたのは、コロナウィルスの蔓延への対応でした。当初は、そのウィルスの性質もつかめないまま、人々の心に恐れや不安が拡がりました。人と人の距離（ソーシャルディスタンス）も密にならないために強調されましたが、それは身体的な距離にとどまらず、人との心の距離の拡がりも生みました。人々の働き方や教育の在り方も変化を強いられ、リモートワーク、奉仕をしている神学校でもリモート授業が長く続きました。色々な変化を全ての人が通されている事態です。徐々にもとに戻されている部分もありながら、コロナ第三波の到来も大規模になることが危惧されています。全国に拡がるJECAの諸教会も、地域の状況によって深刻度は異なりましょうが、同じく戦ってこられたと思います。YouTubeやZoomなどを駆使し、礼拝や諸集会も継続できました。それは、新たなコミュニケーションの可能性に目が開かれる反面、ナマで他者とかかわるのとは違う、違和感を多くの者が持っています。

JECAでは早々「コロナ対策室」が立ち上げられ、加盟教会での対応を調査し、医学的、疫学的又神学的な観点からタイムリーに、助言が発信されてきました。その肝になることは、「コロナに適切に対応しつつ、過度な恐れを取り除き、どうしたら教会の生命線を死守できるのか」という事でした。多くの人々が恐れと不安をもって生きている時代に、この世に対して（宣教）、また教会の内側に（信徒の育成）どのように神のいのちをお伝えできるのかも、大切なポイントです。

さて、疫病の蔓延は、教会の歴史の中でも、繰り返し経験されてきました。ヨーロッパでは、中世～近世にかけてペストの大流行の中で都市が閉鎖され、まじかに迫る死の恐怖と向き合いながら信仰者は生きてきました。人々はただ神の癒しと救いを祈り求めました。当時制作されたドイツのグリューネバルトの礼拝堂のキリスト像では、全身に病を負ったグロテスクなキリストが十字架に付けられた姿で立てられています。（日本では大塚国際美術館に素晴らしいレプリカがあります）。その姿に描かれているのは疫病と人間の罪の連関性、そしてそれを癒す神の力への信頼です。全身を病魔に侵されたキリストは、イザヤ書五三章三節以下のメシヤの姿を彷彿とさせます。

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼はわたしたちの病を負い、私たちの痛みを担った。」

当時は、疫学的な知恵がなかったから、病気の癒しの祈りもこのような像に頼らざるを得なかったと考える方もおられるでしょう。しかし、現代の私たちは疫病に関しては、キリストにではなく、ウィルスの性質の解明、決定的なワクチンの誕生に

（2ページへ続く）

（1ページからの続き）

救いの希望を託すのでしょうか。もし、そうであれば今回の事は一過性の災禍という事になりましょう。

「わたしは光を造り出し、闇を創造し、平和をつくり、禍を創造する．わたしは、主、これらすべてを行うもの。」（イザヤ四五章七節）

主はこのコロナ禍をも支配されています。いいかえればこのような経験を通して「神はどのようなお方か」を示そうとされています。私たちはグリューネバルトの時代の信仰者と同じように、「この事態の中で、あなたは何を問うておられるのでしょうか」と主に問い返すことを忘れてはならないのです。神はどのようなお方かを具体的な、今後の対応の中で考えましょう。いくら医学が進歩しても、最新の医術や決定的なワクチンが人を癒すのではありません。あくまでそれは癒し主の神の働きに、補助的に働くものです。主の主権を忘れないようにしたいものです。

先日、属している中部地区のオータムセミナーが、吉田浩二師（ＪＥＣＡコロナ対策室）を迎えて行われました。その中で教えられた事も含め、今後の対策を、「主はどのようなお方か」との問いと関連付けて考えましょう。

（1）どのような状況下でも神は教会に使命を与えておられる。

すなわち、教会が人と人の間に隔ての壁を立てないこと。換言すると「感染０を目指さない。」～０を目指すと偏見が生まれる～かつてのライ病対策は患者の分離、隔離であって、家族からの分離、社会からの隔離によって健康なものを守ろうとした。患者に対して偏見を助長する働きに教会が加担することがないように。

（2）教会の礼拝などの活動は極力休止しない。

換言すると社会の「同調圧力」に唯々諾々と従わない。

五月ごろある地区のＪＥＣＡの加盟教会近隣の方から○○教会では、未だに礼拝を行っている（実際には15名ほどに絞って）。クラスターの発生予防のため礼拝をやめるように指示してほしいとの連絡があった。（やわらかに仲介をお断りしました）

（3）新しいコミュニケーションツールの有効性と限界を知る。

私の牧する教会員で英国、ベルギーやサウジアラビア在住の兄姉がWEBでの礼拝、週日の小グループに加わる事ができ、現地での礼拝出席が叶わない方々にも、霊的な食物を届けることが出来ました。一方で、対面の礼拝に出席せずに霊的な食物を得ることで良いと考えるリモートクリスチャンを生み出さない工夫が必要であると考えます。

この時期、みなさまと共に歩める幸いを、主に感謝します。

特集　コロナ禍

コロナ禍にあって窓口の働きと祈り

新型コロナウィルス感染対策窓口

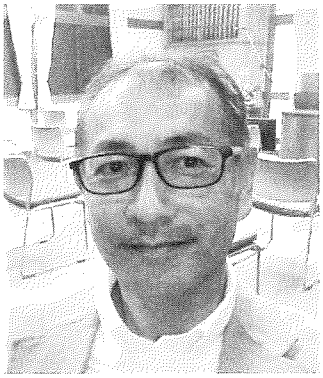
松村（まつむら）　識（さとる）

二〇一九年十二月、中国の武漢で発生した新型コロナウイルスは、年が明けた二〇二〇年の一月に日本国内で最初の感染者が見つかりました。その後、経路不明の感染者が現れ始め、二月の終わり小中高校の休校要請が出されてから警戒が強まりましたが、感染拡大を食い止めることができず、四月七日、政府の緊急事態宣言が出され、五月二十五日まで続きました。各都道府県単位での自粛要請なども行われましたが、四月中旬をピークとする第一波、八月初旬をピークとする第二波、そして、感染者の高止まりが続く中、この原稿を書いている十一月中旬、再び第三波が始まりました。

コロナの感染拡大は我が国だけではなく、パンデミック（世界的大流行）となり、この原稿を書いている、十一月二十日現在、世界全体の感染者数は約五六七五万人、死者数は約一三六万人です。これほどまでに大きな感染症は一九一八年から一九一九年にかけて猛威を振るったスペインかぜ（インフルエンザ）以来のことで、おおよそ今生きている世代では初めての経験です。

教会連合の全国運営委員会では、加盟教会の対応のための情報提供として、新型ウイルス感染対策窓口を設置し、四月から、これまで十回にわたる情報提供を行い、互いの祈りと支援、相談、また、各教会の対応をアンケートし、情報交換と提供に努めてきました。

私たち誰もが初めての経験に戸惑いながら、一人の人として、家族として、あるいは教会としてこの状況をどう受け止めて



いいのかと苦慮を重ねてきたと思います。それぞれ置かれた立場は千差万別です。緊迫した医療現場で働いておられる兄姉、めまぐるしく指示や対応が変わる中で苦慮された教育現場の兄姉や子どもたち、リモートワークという慣れない形態を取らざるを得なかった兄姉、仕事がままならなくなり、様々な困窮を覚えた兄姉、都市生活と地方の生活の違いもコロナに対する向き合い方が違います。「正解」など一つもありません。私は教会で、次のように呼びかけをしました。「ウイルスに関する受け止め方の感覚というのは人それぞれ、また、その人の置かれている場もまた、それぞれ。それを責めたり、批判したりしないでいただきたい。そして、互いを尊重しましょう」と。今に至るまで、兄姉がその通りをしてくださっていることに感謝をしています。それはまた、教会連合の交わりの中でも同じです。

長引くこの状態にみな疲れを覚えます。その一つは、漫然とした不安でしょう。コロナ禍の生活は、誰がどこでどのように感染したかわからないような事例をたくさん耳にします。そして、重症化して亡くなる方、軽症とはいえ長引く後遺症。もし、自分が感染したらどうなるだろうか。あるいは、先行きの不安。「安心」と言えるものの保証は、どこにも行かず、誰とも会わないことでしょうが、そうもいきません。教会の活動も各教会、様々な工夫をしながら続けています。

その中で問われているのは、私たちにとっていのちとは何か、教会とは何か、礼拝とは何か、聖徒の交わりとは何か、聖餐とは何か、神に信頼する信仰のあり方など、私たちが普段大きな意識をせずに習慣的にしていることの意味です。コロナで何もかもが簡素になっています。できなくなっています。形式的にしていたことには意味がないと誰もが悟って私たちの生活は変わっていくでしょう。本当に大切なことが見えるように、また、そのように試みられた人たちの中から救いを求める人が起こされることを私は願っています。

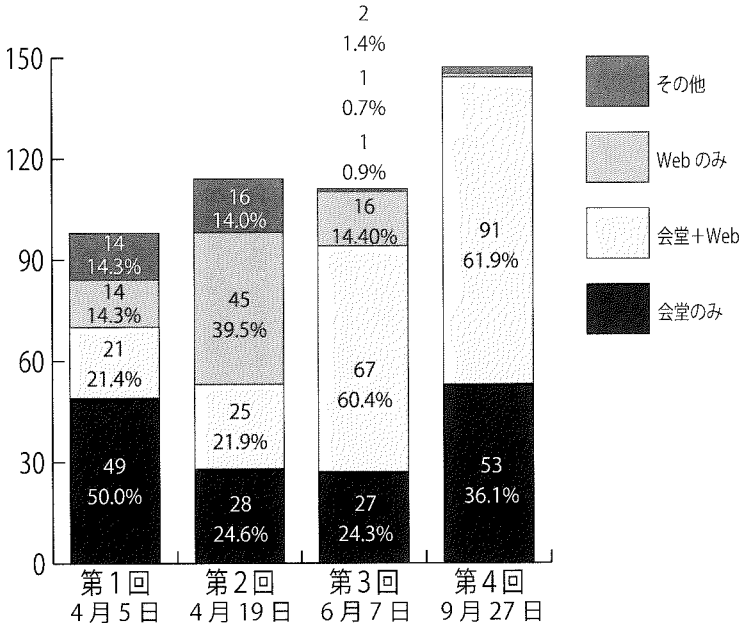
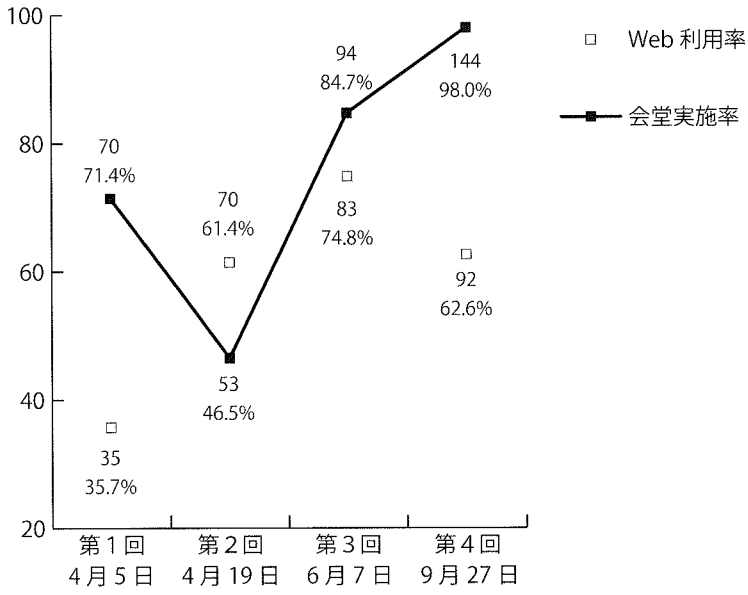


図1　礼拝実施状況の推移



会堂実施率及び Web 利用率

新型コロナウイルス対策窓口では四回にわたるアンケートを実施しました。各教会の対応、集まって礼拝をするのか、インターネットを用いた礼拝をするのか等の状況の分かち合いをしました。緊急事態宣言を受けて、会堂での礼拝を休止してネット礼拝を試行する教会が多く見受けられました。その後も、初めての対応に苦慮しながらの状況が伺えました（図1）。

必要とされている情報は、会堂に集まって礼拝するリスクやネット礼拝のやり方などでした。窓口の奉仕をしてくださっている吉田浩二師（北海道地区厚別キリスト福音教会牧師・医師）が、礼拝堂に集まるリスクについての情報提供をしてくださいました。また、ネット上で利用する賛美歌著作権の情報について中山信児師（南関東地区菅生キリスト教会牧師、福音讃美歌協会理事）が情報提供をしてくださいました。

緊急事態宣言が解除されて後、会堂での礼拝を再開する教会が増えました。感染症の基礎知識としての感染予防に関する情報を吉田師が提供くださいました。また、換気に関する情報を私も提供させていただきました。

九月に実施したアンケートではほとんどの教会が会堂での礼拝を実施するようになりました。そこでは様々な工夫をして礼拝をしている様子がわかりました。礼拝場所

を分散している教会、礼拝の回数を増やして分散している教会、週によって集う人を決めて分散している教会など、礼拝を続けるために様々な工夫を諸教会がされています。また、その対応は地域差が大きく見られました。都市部の教会ほど慎重です。

礼拝を休止した理由を図2にまとめました。自粛要請、とりわけ礼拝生活は「不要不急」に当たるのか、周囲への配慮や証のため、それも教会としての判断、個々人の判断ということにも苦慮や葛藤を覚えたことでしょう。感染者への差別、自粛警察や同調圧力など、普段の生活の中では表に表れないようなことを耳にし、心を痛めること、あるいは自分の内なる思いを探られることも少なくなかったと思います。

また、会食を伴う集まりへの警戒もあって、聖餐式を行っていない教会が半数近くあることがわかりました（図3）。コロナ窓口では、吉田師が聖餐式における注意事項について医学的見地からの情報提供をそして、また、私たちキリスト教会にとっての聖餐の重要性を再吟味することの勧めを呼びかけました。また、教会にとって、「交わり」の持つ重要性を再認識させられています。毎週集まり、特別なことはしていなくても、顔と顔とを合わせるということでいただいている励ましは実に大きなものです。なおこと、時間と場をともにすること、互いに祈り合う交わりにいかに慰めと力をいただいているのか、それは私たちが神の家族であることの恵みを覚えさせられ、一つに生きる喜びが失って初めてわかるものであろうと思います。

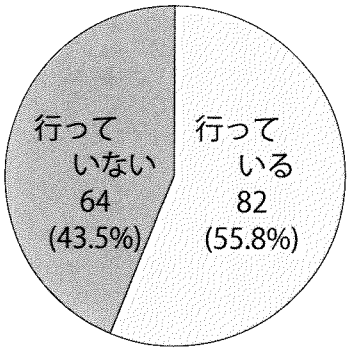
教会連合は一律の要請などは行いません。各教会が自立的に判断をして意思決定をすることを重んじているからです。一方で、コロナ窓口では各教会の参考になる情報提供と互いの励まし合いと交わりができるようにと心がけてきました。至らぬ点もありましたが、お許しいただき、情報を役立ててくださればと願っています。

聖書の中では、剣（戦争）、飢饉（自然災害）、疫病（感染症）が国を揺り動かす三大要因として繰り返し出てきます。その度に問われるのは信仰者の信仰と信仰共同体のあり方です。単に困難に直面して苦労したといういことにとどまらず、その中で問いかけられているのは信仰復興です。人にはどうにもできない試みをして神に立ち返れという呼びかけです。

『もし、さばきの剣、疫病、飢饉などのわざわいが私たちを襲うなら、私たちはこの宮の前、あなたの御前に立ちます。あなたの御名がこの宮にあるからです。そして、私たちは苦難の中からあなたに叫びます。あなたは聞いて、お救いください。』（Ⅱ歴代誌二〇章九節）

これはユダの王ヨシャパテが試みの中で祈った祈り、元々、ソロモンが主の宮の奉献の祈りとして祈ったものです（Ⅱ歴代誌六章二八～三一節）

コロナの中、どのように「うまくやるか」よりも、信仰者も教会も試みを経てむしろ強められるように。そして、本当に大切なことを見分ける目を与えられ、あるいは養うことができるように。神に叫び祈り、その助けと恵みをいただくことができるようにともに祈りたいと願っています。また、これは世界規模に国を超えて、民族を超えて、争いの手を止めて敵対心を鎮め、あらゆる境界を超えてともに祈りに向かうことが求められているのではないでしょうか。無為な争いを重ねていること、差別や格差を生み出す利己的な思いを持っていること、手を取り合って生きることの大切さを、もう一度神の御前に問い直し、とりなし祈る者でありたいと願います。



第四回（9月27日）

図3　聖餐式の実施状況

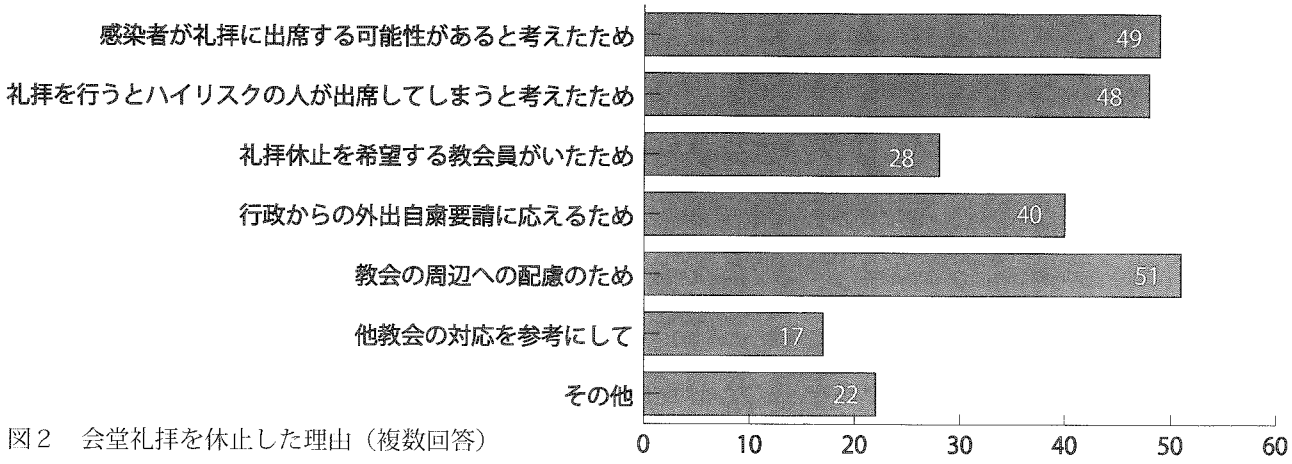


図2　会堂礼拝を休止した理由（複数回答）

コロナ禍での教会の対応

永山福音キリスト教会

山本　門

二月二十八日（金）夕方、北海道は全国に先駆けて、知事による緊急事態宣言が発表されました。宣言は「道民の皆さまの大切ないのちと健康を守るため、この週末は外出を控えていただくようお願いします」という内容でした。主にあって与えられたいのちを大切にすることは、私たちにとって当然のことです。けれども、主の日の礼拝は私たちのいのちにとって欠かすことのできないことです。主の日を2日後に控え、限られた時間の中で、この宣言に対してどう考えたらよいのか。それぞれの教会が対応を迫られました。これが、北海道におけるコロナ禍での教会の対応の始まりでした。

この中にあって、私たちが問われたことは、礼拝とは何か、集まることの意義は何か、教会とは何か、という根本的な問いでした。そして、教会の一人ひとりが、苦闘しながら、このことを真剣に考え、主に求めて祈り、主にあって決断して行動することへと導かれました。けれども、置かれている状況等により、それぞれの主への応答には違いがありました。時には、その違いを理解することに難しさを覚えることもありました。そのような経験を通して、互いの違いを認めつつ、キリストのからだとして一つとされて歩むことがどういうことなのか、具体的なこととして学ばされたように思います。このプロセスこそが本当に尊いものであり、このことを通して主が教会を成熟に向かわせてくださっていることを、教えられています。

なお、地区としては二月二十七日付「新型コロナウイルスへの対応について」を発信し、換気・手指消毒の徹底、飲食を控えるなどの注意喚起を行いました。三月の地区総会は文書による議決とし、三月二十七日にはコロナ禍に関する祈りの課題を諸教会に配付し、また地区としての緊急支援について決定しました。現在、教職者会やサマーキャンプ、地区聖会などの諸行事は、webを用いたり、各ブロックごとに集まったりしながら、工夫して行われています。

水戸下市キリスト教会

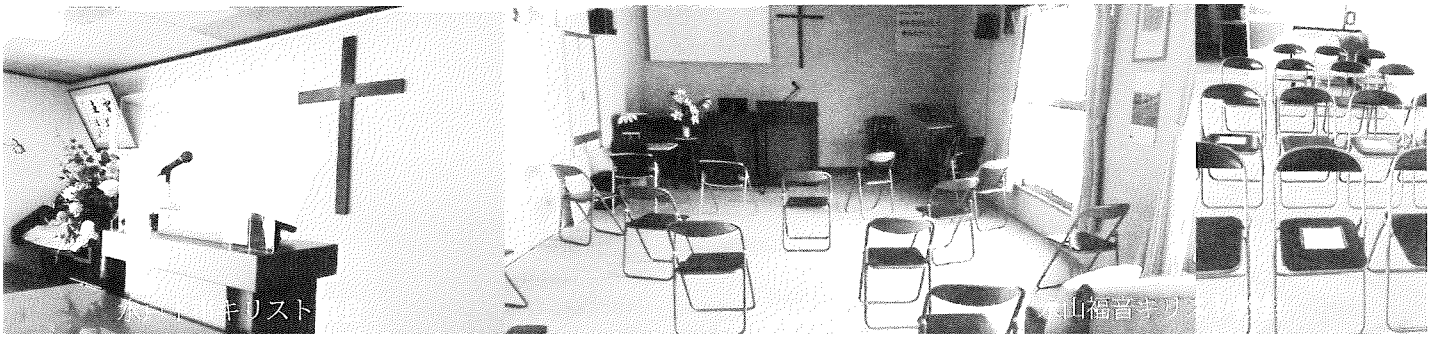
渡部　和彦

新型コロナウィルスの影響が全国に広がりつつある中で、水戸下市キリスト教会では四月五日の役員会にて、「水戸市から外出自粛通達など異常事態になった場合には、インターネット配信・説教原稿の配布などで対応する」などと定めました。すると茨城県から翌週四月十八日（土）からの自粛要請が出されました。そこで翌十九日(日)から会堂利用の停止をし、礼拝は一部奉仕者による配信（facebookを利用）、説教原稿のお届けで対応し、他の集会はお休みとしました。周囲の人々、社会の要請に応える形での活動の自粛でした。

五月に入り、十四日に国から、緊急事態宣言の区域変更が出され、茨城県はその対象から外れました。ただちに教会員から会堂での礼拝再開の声が上がり、自粛を希望する方の意志は尊重しつつ、五月十七日（日）より会堂にての礼拝を再開しました。以降、諸集会のすべてを会堂で行い始めました。祈祷会、婦人会をはじめ、聖餐式、愛餐会も順次再開しました。自主的な参加が前提ですが、ほぼ元通りの活動となっています。

水戸下市キリスト教会は礼拝出席者が15名前後と少数なので、蜜になりにくく、互いの行動範囲も理解しているので、いわゆる「家族の範囲」のようにしてともに集まることができているように思います。自粛期間は、礼拝配信は行っていましたが、交わりの手段は特になく、会堂に集まることの機運が高まったのかもしれません。なお、仕事上東京と行き来のある若い世代は、教会の高齢の方を配慮して、その後も礼拝出席を自粛するケースが見られました。

具体的なコロナ対策は、消毒液の設置、マスク着用、ペーパータオルの設置、換気、説教壇のアクリル板設置（八月）などです。毎月の役員会にて対策について話題にしており、手放しで「もう大丈夫」ということはありませんが、一方で周辺の教会と比べて相対的には活動に制限がかかっていない状態であるように思います。



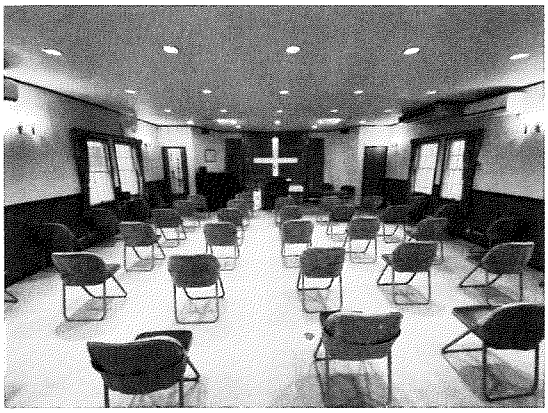
コロナ禍での教会の対応

橋本キリスト教会

牧野　広隆

教会の生活圏に感染症指定医療機関があります。この病院は今年一月に武漢から帰国し新型コロナの感染していた患者を受け入れ、二月に横浜港停泊のクルーズ船で感染した患者たちも搬送された病院です。このため近隣の新型コロナへの意識は高く、緊急事態宣言より以前から危機意識は非常に高いレベルでした。

地域の意識に同期する形で教会も対応を整え、礼拝・集会時のマスクは必須、入口でのアルコール除菌、検温、タオルの撤去など、礼拝・集会時の換気を開始しました。また三月第一聖日からストリーミングを開始し、外出自粛を願う方にも対応しました。三月末から六月まで移動時の感染リスクを考慮し、原則として会堂まで徒歩十分以内、十名前後に限定した礼拝を守りました。六月の役員会で社会の平常化への動きと共に、教会内の交わりが途絶する危機感から次善の策を検討しました。しかし会堂は狭く、ソーシャルディスタンスを考慮すると最大二十五名以下の礼拝が適切と判断。七月から三グループ分け礼拝に移行しました。しかし、東京都の感染者数は増加傾向になり、八月の役員会で九月から最大二十名以下とする四グループに再編し年内継続としています。



CSは四月を休止、五月から小学科、中高科はリモートを基本とし、月一回だけ会堂で共に礼拝しています。幼児向けのナーサリーは九月から感染防止マットなどの対策をして再開しました。

リモート併用礼拝は交わり面で大きな課題です。特に会堂建設を願う私たちにとって、共に集まり祈り、話し合えないことは大きな障害です。しかし家庭の中で礼拝が捧げられ、未信の家族への宣教のきっかけとなる希望も覚え祈っています。また求道者や受洗志願者の学びをリモート併用にすることで、実施ハードルが下がりました。感染防止の制約に難しさも覚えつつ、教会の働きに新しい面が加えられた恵みも覚えています。

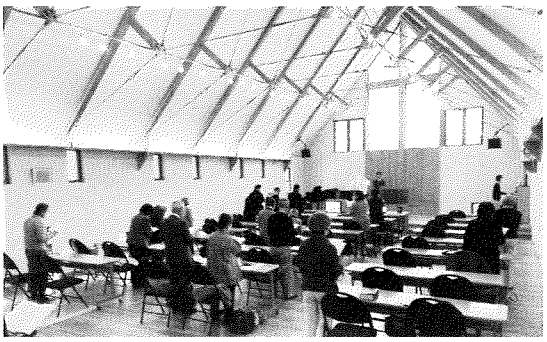
宮崎北聖書キリスト教会

荒平　大輔

宮崎県内の最初の感染確認は三月四日でした。普段、県内在住者が仕事以外で県外へ往来する機会は多くないように思います。交通手段は圧倒的に車で、お店に行列が出来ることも珍しいような地方都市です。しかし、教会員の多くが医療・福祉・教育・行政の仕事に携わっており、注意が必要でした。どのように対応すべきか、JECA新型コロナウィルス感染対策窓口の情報は参考になりました。

【対応について】①宮崎市で出された注意喚起を受けて、四月十二日のイースターから礼拝人数を十人未満に。当日はバプテスマ式もありましたが、責任役員を中心に会堂に集まり、教会員の皆さまにはオンラインで出席していただく形をとりました。②GW明けの五月十日から、九時～／十時十五分～／十一時三〇分～の三回に分け、各四十五分ずつの会堂での短縮礼拝開始。五月三十一日のペンテコステから二回の分散礼拝になりました。七月からは一堂に会する計画でしたが、高齢者や基礎疾患のある方など少人数が安心できる方のために、現在まで二回に分けて礼拝を行なっています。

【感謝】①オンラインを含む礼拝者出席者数や献金は、コロナ禍以前とあまり変わっていません。むしろ求道者も与えられています。②祈祷会について、会堂に集う＋オンラインで行うようにしたところ、参加者が増えました。仕事後に教会に来るのが難しかったり遠方だったりと、以前は参加されなかった兄姉が毎回参加されるようになりました。③地方からはまず参加出来なかった集会がオンラインで行われるようになり、出席出来るようになったのは本当に感謝です。ぜひポストコロナでも継続して欲しいと願っています。



【今後の課題】交わりの機会が減っていること、伝道集会が行えないことなどは、共通の課題だと思います。クリスマスも今年は特別な集会は行わないことにしました。ただ、いつもの忙しいクリスマスではなく、静まってクリスマスの意味をじっくりと味わう良い機会ではないかと思わされています。各個人が生活の中でじっくりとみことばに向き合い、信仰を深め証ししていくことを励まし合っていきたいと願っています。

キャンプ場の現状

奥多摩福音の家ディレクター

牧野（まきの）　広隆（ひろたか）

関東圏外の方々に馴染みのない奥多摩バイブルシャレー（以下：ＯＢＣ）と奥多摩福音の家（以下：福音の家）の現状と祈祷課題を全国の皆様にお知らせできる機会を心から感謝します。

両クリスチャンキャンプ場の距離はわずか６㎞です。ＯＢＣは一九六〇年にSEND国際宣教団によって青梅市に、福音の家は一九六五年にリーベンゼラ日本宣教団によって奥多摩町に設けられ、各宣教団の生み出した教会の信徒育成に加え、諸団体の宣教支援やＪＥＣＡ設立後は関東四地区の諸活動に用いられてきました。

常勤の日本人スタッフはＯＢＣ二名（大倉寧師、佐々木信兄、他に宣教師スタッフ数名）、福音の家四名（永山治兄、伊藤禎市兄、林久美子姉、大通堅兄）です。コロナ禍により三月以降、ＯＢＣも福音の家もキャンセルが相次ぎ、主催キャンプは全て中止しました。理由は讃美、食事、入浴、就寝時などに濃厚接触の機会が多く、クラスター発生が危惧されるためです。

日本人職員のみの福音の家は三月時点で年内に施設を閉鎖する危機にあると判断、ＪＥＣＡ関東四地区の諸教会とＷＥＢ上で状況報告と献金の要請をしました。またＯＢＣと福音の家が連名でお祈りと献金要請を行うと共に、ＪＥＣＡ全国運営委員会もお祈りの要請をして下さいました。これまでに多くのお祈りと献金に支えられました。本当に感謝してます。

受けるばかりでは…との思いから、福音の家は奥多摩セミナーを内田和彦先生のご協力によりＤＶＤとして六月から頒布、八月は小学生向けと中高生対象のオンラインキャンプ、十一月にＷＥＢセミナーを実施、黒パン＆クッキー、シュトーレンなどの物販も実施しました。ＯＢＣも八月に中高生以上を対象としたオンラインキャンプを実施し、十月にはチャリティーライブを配信、可能な努力としてオンラインショップも開設しています。

宿泊施設としては、ＯＢＣは緊急事態宣言解除後に「新型コロナウィルス感染拡大防止のお願い」を提示し再開しています。福音の家は八月のみ家族利用限定で営業し、現在は休業状態です。

再開したＯＢＣも感染対策により従前とは異なるため、両キャンプ場の経済は厳しい状況です。特にスタッフの雇用は重要な課題で、雇用調整助成金を受給しましたが深刻な状況です。

現在も感染者数は再拡大しており、明るい見通しを立てるには難しい状況です。以下の点を覚えてお祈り下されば感謝です。

一、キャンプで励まし支えられていた小中高生、青年たちの信仰が守られるように。

二、効果的なオンラインキャンプ宣教の知恵が与えられるように

三、スタッフの雇用のため。

四、施設維持費が満たされるように。特に福音の家はほぼ借地のため地代が大きな負担です。

最新情報はＷＥＢで御確認下さい。

ＯＢＣ　https://o-bc.net

福音の家　https://ofi.camp

↑奥多摩福音の家

↓奥多摩バイブルシャレー

熊本人吉豪雨災害

宮崎北聖書キリスト教会　荒平　大輔

七月四日の熊本県人吉市の豪雨災害についてご報告致します。

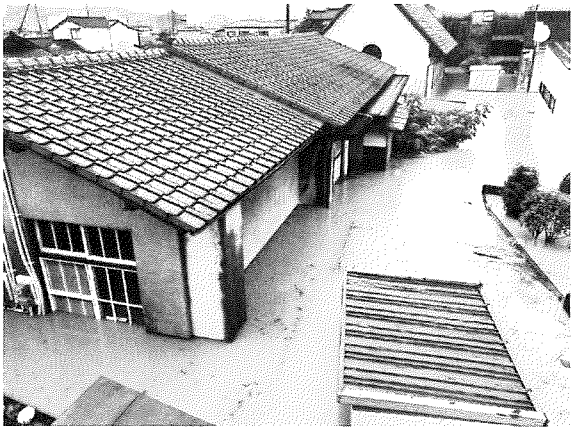
以前より交わりのある人吉聖書教会（バイブル・プロテスタント）が床上一メートル以上の浸水被害に遭いました。水道の水が飲めないということで、翌日、教会備蓄の水を持って伺いました（二リットル×約三五〇本）。近所の教会員宅も水に浸かり、町全体が甚大な被害を受けていました。明け方からあっという間に水が上がって来たということでした。午後には水は引いたそうです。

コロナ禍初の大災害ということで、様々な制限がありました。一番の影響はボランティアが熊本県内に限られたことでしょう。九州災害キリスト支援センターのボランティアベースが立ち上げられ、九月末まで人吉聖書教会を中心に支援活動が行われましたが、新型コロナウィルス感染者が宮崎でも増えたため、教会からのボランティアは姉妹たちが一度行っただけでした。ただ、そのような状況の中で熊本県内の教会の交わりが与えられたのは感謝だったという声を聞きました。

また、災害直前の六月に全国キリスト災害ネットの第一回目の会合がオンラインで持たれており、全国への情報発信がスムーズに行われたのも感謝だったということでした。必要な物資がすぐに被災地に届けられ、現場での混乱も抑えられたようです。

先日、人吉聖書教会の森下薫牧師のお話を伺いました。被災したことは大きな痛みだけれども、過疎化の進む田舎の教会にとって、沢山の支援をいただいたのは大きな励ましだった。いろんな兄姉との交わりが与えられ、本当に勇気付けられたということでした。

しかし、ボランティアの数が少なかったために、手付かずの場所も多く残っています。十月中旬に訪ねた際もまだ町は埃っぽい状態でした。続けて覚えてお祈りくだされば感謝です。



牧師館二階から。手前は旧幼稚園舎、奥が礼拝堂。

ニュースと祈り　News & Prayer

●第十四回全国総会速報

コロナのために第十四回全国総会は、十一月二十五日（水）に郵送による全国総会の開票作業が行われ、全議案が承認されました。つつじヶ丘キリスト教会（東京）、十日市場めぐみキリスト教会（神奈川）、国分寺キリスト教会（香川）、福岡聖書教会（福岡）が新たに加盟教会となりました。また、新全国運営委員の選挙も併せて行われ、全国運営委員長に松元潤師（北海道地区若葉キリスト教会）、副委員長に松村識師（西関東地区甲府キリスト福音教会）を含め十二名の全国運営委員が選出されました。次号にて特集の予定です。

●全国青年・ユース大会DAWN2021延期のお知らせ

二〇二一年五月に計画されていた全国青年・ユース大会DAWN2021はコロナの影響のため、開催が延期されました。また、十月十八日にオンラインでプレ大会が行われました。プレ大会はYouTubeでご覧いただきます。詳細はホームページにて（www.jecayouth.com）

●新旧全国運営委員の引継ぎ

十二月十五日（火）～十六日（水）、新旧全国運営委員の引継ぎが行われました（会場＋オンライン）。第十五期の新しい全国運営委員は、委員長・松元潤（若葉キリスト）、副委員長・松村識（甲府キリスト）、書記・菅原豊（白金キリスト）、会計・鎌田雅人（鶴ヶ島聖書）、以下あいうえお順で、荒平大輔（宮崎北聖書キリスト）、臼井信博（石岡キリスト）、加藤光行（朝日聖書）、櫛田信（中山キリスト）、國分広士（中野島キリスト）、須田毅（西堀キリスト）、秦真道果（夙川聖書）、原田帆海路（岩井キリスト）となりました。お祈りください。第十四期の先生方、尊いご奉仕に心から感謝致します。

■編集後記

今号の特集からは、苦しい中にあっても主の恵みに感謝すること、互いに尊重し合い支え合っていくこと、そして、主権者なる神に望みを置くことの大切さを教えられます。

コロナ禍により、私たちの日常は大きく変わりました。置かれている状況の中で、それぞれの教会に、またお一人おひとりに苦慮があったことでしょう。今なお、難しい状況は続いていますが、この歩みのうちに注がれている主の恵みを見つけ、励まし合いながら、主に期待して、みなでともに歩んでいきたいと願っています。

キャンプ場の現状が深刻であることを改めて受け止めています。熊本県人吉市の豪雨被害がまだ終わっていないことを覚えます。移動の自粛が続く中にあり、直接助けに行くことが難しい状況ですが、それを何もしない言い訳にすることなく、祈りをもって支えていきたいと思わされています。

諸教会の歩み、兄弟姉妹一人ひとりの歩みが、主にあって守られますように。（い）

●JECA フォーラム編集室　forum@jeca.jp ●ご意見、お問い合わせは宮崎北聖書キリスト教会　荒平大輔まで　TEL 0985-39-0883
●広報委員　荒平大輔（長 /JECA フォーラム）、石井陵太、渡部和彦、姜明善、牧野広隆、武田遣嗣、松村識（ホームページ / 担当全国運営委員）